

NAGOYA CITY MUSEUM NEWSLETTER

季刊

vol.

214

名古屋市博物館だより

編集・発行／名古屋市博物館 〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL (052) 853-2655 FAX (052) 853-3636 <http://www.museum.city.nagoya.jp>

平成27(2015)年7月1日発行 (年4回1・4・7・10月)
3,800部発行 無料 古紙バブル配合再生紙使用



“魔女”とは誰だったのか？

扉を開け、
魔女の世界へ！

2015年7月18日(土)～9月27日(日)



野草から痛み止めの薬をつくる“魔女”。
ホウキにまたがり空を飛ぶ“魔女”。
鼻をピクピク動かし、お客さんを犬に変える“魔女”。
美魔女・・・

私たちはいろいろな“魔女”を知っています。

「魔女の秘密展」では、魔よけのまじないの道具、「魔女裁判」に関する書物や拷問道具、“魔女”をテーマとした絵画など約100点の展示資料で、わざわざもたらす者としてのヨーロッパの魔女像から現代日本のコミックに登場する“魔女”たちまでを紹介します。“魔女”、そのイメージのうつりかわりをご覧ください。

【写真右上から時計回りで】いずれも部分。

空を飛ぶ魔女 アルブレヒト・デューラー 1500-1503 中世犯罪博物館 ©Mittelalterliches Kriminalmuseum in Rothenburg ob der Tauber

村の魔女 アルフレート・クビーン 1934 オーバーエスターライヒ州立博物館 ©Oberösterreichisches Landesmuseum

魔女 テレーザ・フェオドロワナ・リース 1895 ウィーン博物館 ©Teresa Feodorowna Ries, Hexe, Wien Museum

サバトへ行く前のレッスン ルイ＝モーリス・ブーテ・ド・モンヴェル 1880 ヌムール城美術館 ©RMN-Grand Palais / René-Gabriel Ojéda / distributed by AMF

特別展 名古屋めしのもと

展示準備ノート

徳島に豆みそを訪ねて

東海三県の豆みそ

12月12日からはじまる特別展「名古屋めしのもと」に向けて、日々食文化について考えています。自然と名古屋の食文化を特集したテレビ番組や雑誌記事に目を向けることも多くなりました。多くの番組や記事では、みそかつ・どて煮などのいわゆる「名古屋めし」が紹介され、その特徴として豆みそが強調される印象があります。

それでは豆みそとはどのような種類のみそなのでしょう。みそはこうじの種類で米みそ、麦みそ、豆みそ、それ以外の調合みそに分かれ、現在でもみその好みには地域差がみられます。

ここ数年の全国の生産量は、米みそが約80%、麦みそと豆みそがそれぞれ約5%、調合みそが約10%ほどです。米みそは各地で生産され、麦みそは主に中国四国地方の一部と九州地方、豆みそは主に東海三県（愛知・岐阜・三重）で生産されています。また、色によって赤みそや白みそに分けられるので、赤みその米みそ（仙台地方など）もあれば、白みその米みそ（関西地方など）もあります。八丁みそ・赤だしみそなどとも呼ばれる豆みそは、長期間の発酵によって濃い赤みそとなります。

豆みそは生産量の割合こそ高くありませんが、全国的に人気のある「名古屋めし」の勢いとともに知名度が高まっていくのかもしれません。

徳島に伝わる豆みそ

このように紹介すると、豆みそは東海三県だけで生産されていると感じられるかもしれません。ところが意外に離れた地域、四国の徳島県にも豆みそを造る文化があります。平成27年3月、その実態を調べるため、豆みそを生産している徳島県のみそ業者さんを訪ねました。

まずは徳島県藍住町のヤマク食品株式会社を訪ねました。徳島県では寝かせることを「ねさす」といい、長期間寝かせる（熟成させる）豆みそは「ねさしみそ」と呼ばれます。豆みそを生産するといっても東海三県とは異なり、徳島で主流なのは「御膳みそ」と呼ばれる米みそです。ただ徳島県内でも海岸部（東部）よりも山間部（西部）に行くほど、ねさしみその需要が高まるようです。



豆みそを生産する地域（東海三県と徳島県）

徳島県阿波市の三浦醸造所は種こうじを使わずに、蔵についた（空気中の）こうじ菌を利用してねさしみそを生産しています。このような古くからの形は、かつては東海三県でもみられました。ただし東海地方では、蒸した大豆で球状のみそ玉を作り、徳島では細長いなまこのような形にするなど違いもあるようです。

実は徳島に豆みそをもたらしたのは尾張出身の蜂須賀家と家臣団と伝えられています。もしかしたら、徳島にわたった尾張出身の人たちは独特な豆みその味を忘れられず、米みそ文化とともに豆みそ文化が伝えらることになったのかもしれませんが。

特別展「名古屋めしのもと」では、調査の成果を反映させて、様々な角度から名古屋めしのもととなる豆みそについて紹介したいと思います。

（長谷川洋一）

今回の調査では、ヤマク食品株式会社、三浦醸造所、徳島県味噌工業協同組合のみな様から多大なるご協力をいただきました。感謝申し上げます。



徳島県の豆みそ（ねさしみそ）と米みそ（御膳みそ）
ヤマク食品株式会社提供

古代中国の銅鏡をよむ

銅鏡を「よむ」

銅鏡を「よむ」、とは、きつと奇妙に感じられることでしょう。確かに、普通であれば「見る」というところです。

しかしながら、古代中国の銅鏡には、神秘的で美しい文様、その文様に表現された神話や伝説、銘文に託された願い、高度で緻密な工芸技術など、多くの特徴と魅力と謎が凝縮されています。造形美を鑑賞する、神話の内容を知る、古代の技術を探るなど、「見る」というよりも、モノに関わるさまざまな多様な事柄を「読み取る」面が多いのです。

ですから、銅鏡を「見る」ではなく、あえて「よむ」と表現しました。「よむ」ことができれば、きつと楽しくなるにちがいありません。そういうわけで、ここでは銅鏡の「よみ方」を少し紹介します。

銅鏡に表現された世界

銅鏡には、古代中国の人々の世界や宇宙に対する考え方、あるいは神々を表現したものが数多くあります。それらは、正確な世界地図もなければ地球の丸い姿などわからなかった、まだ神と人が共存していた時代に生み出された、伝統的な世界観です。

ここでは、「方格規矩四神鏡」を例に挙げます(図1)。銅鏡の円い形は「天」を、中央のつまみ(鈕)は天の中心を、四角い枠は「大地」を表しています。四角い枠の四辺にあるT字形は、大地の四方向の縁に立つ天を支える柱、周囲にあるL字形とV字形は、天と地をつないでおく綱の留め具を表します。さらに四方向に描かれた青龍・白虎・朱雀・玄武の「四神」などの獣は、天上世界にいる神々の姿です。



図1 方格規矩四神鏡の文様

つまり、大地は四角形で、半球形の天がその大地の果てのさらに彼方まで全体を覆っていて、天と地はロープでつながれている。天には中心があり、その周囲に神々がいる。古代中国の人々は、自分たちが暮らす世界の姿をこのようにイメージし、しばしば銅鏡に表現しました。

銅鏡のデザイン

方格規矩四神鏡の場合、文様全体の構図は、半球形の天と平たく四角い大地という、立体的な世界の姿を真上から見たようすを表現しています。立体を平面上に展開するのですから、もちろんさまざまなデフォルメがなされ、細かくいえば辻褄の合わない点も当然あります。しかしそこは、全体像をどのように整然と美しい文様にするかが一番重要です。注目は、3次元的なイメージを2次元に変換し、洗練された造形に表現した、古代中国の人々のデザイン力の素晴らしさなのです。

文様に描かれた神・獣の姿や造形もおもしろいところです(図2)。どの神や獣の文様も、基本形はもちろんありますが、銅鏡の種類や製作者などによってその造形が異なります。描き方も、神秘的なものやユーモラスなものなど、さまざまです。今風にいえば、一種のキャラクターデザインといえるでしょう。そうした文様の違いを、比べてみるのも楽しいものです。

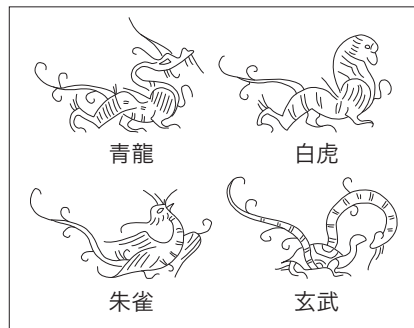


図2 「四神」のデザイン

銅鏡を見に行ってみる

古代中国の銅鏡には、銘文や神話・伝説など、「よむ」べきところはまだまだ盛りだくさんです。そのみどころ、学びどころは実に深いといえるでしょう。まずはここで紹介した「よみ方」を参考にして、博物館や美術館で銅鏡をあらためてじっくり眺めてみてはいかがでしょうか。今まで気に留めなかった銅鏡の世界に、思いをめぐらせてしまうかもしれません。みなさんにみどころや魅力をもっと感じながら観覧いただけるようになれば幸いです。

常設展示室内のフリールームで、「中国古代の青銅鏡」展を、7/14(火)～9/13(日)の期間、開催します。ぜひお楽しみください。(藤井康隆)



モグラの前脚のお守りと「飲むお札」

中世あるいは近世のはじめ頃には魔術や神秘的な力は日常の暮らしに結びついていました。良いことも悪いことも超自然的な力によるものと考えた当時の人々は、悪いことが起きるとそれは「魔女」のせいだとして、それが自分にふりかからないよう、魔よけやお守り、呪文などで防ごうとしたのです。

モグラの前脚のお守りは、暗闇で目が見え、土を掘って複雑な構造物を作るというモグラの能力から目がよくなるお守りとして好まれました。

「飲むお札」は、一枚の紙に一連の小さな聖像が印刷されたもので、病気のときなどに一片を切り取って水と一緒に飲み下したものです。



悪魔払い

キリスト教では、悪魔は人を誘惑して堕落させるものとされています。その悪魔と契約して、したがうのが「魔女」です。キリスト教から見ると「魔女」は神の敵となるのです。

悪魔は直接人に取りつくこともありましたが、このマヨルカ焼の陶板に描かれているのは、悪魔に取りつかれた一人の農夫の悪魔払いをしているところで、聖母のいる木の前で農夫の口から悪魔が出ていく場面です。右上には「この人間は悪霊に取りつかれ、謎めいた暴言を吐きながら、走り出した。マリアさまが悪霊を払ってくれた」と書かれています。

冬

14世紀なかばから19世紀にかけて、小氷期とよばれる世界的に寒冷な気候が続きました。厳しい冬と長雨、気温のあがらない夏。それは不作をもたらし、農業を中心とする当時の人々に大きな打撃を与えました。くりかえし、嵐や雹に見舞われた人々は、それを「魔女」が害をもたらす天候魔術を使ったためだと信じました。寒さと魔女裁判の件数とが関連する-寒さの厳しいときには魔女裁判が多く行われた-という研究があります。

この作品はフランドル出身の画家フィンクボーンによるもので、凍った川でスケートやソリ遊びをしている情景が描かれています。

【写真左上から】

モグラの前脚のお守り 18世紀末 インフィアトラー民俗学ハウス ©Ried im Innkreis, Museum Innviertler Volkskundehaus, Foto: Clemens Mader
ランツフートの「飲むお札」 18世紀 インフィアトラー民俗学ハウス ©Ried im Innkreis, Museum Innviertler Volkskundehaus, Foto: Clemens Mader
悪魔払い 1678年 ウィーン、オーストリア民俗学博物館 ©Austrian Museum of Folk Life and Folk Art, Vienna / Photo: Birgit & Peter Kainz/faksimile digital
冬 ダフィット・フィンクボーン 1610-1620年代 クレムスミュンスター、ベネディクト修道会財団-美術品コレクション ©Kremsmünster-Benediktinerstift

魔女の秘密展 “魔女”とは誰だったのか？

ヨーロッパの中世から近世にかけて、その存在が信じられていた「魔女」。当時、「魔女」は、悪魔に従って超自然的な力でわざわいをもたらす者として忌み嫌われていました。「魔女」から身を守るため、人々は普段からお守りを身につけ、呪文を唱えました。「魔女」は恐ろしくも身近な存在だったのです。

迷信のひとつにすぎなかった「魔女」。しかし、近世のはじめ、それまで「魔女」を恐れながらも受け入れていた世界が変わります。15世紀初頭から、神学者や法律家が「魔女」の存在を理論化しようと試みていましたが、1486年に決定版ともいえる『魔女に与える鉄槌』が出版されます。そこには、悪魔と魔女の関係、魔女の見分け方、魔女の使う魔術、魔術を使ったと自白させるための尋問や拷問の仕方などが詳しく書かれていました。

当時のヨーロッパは「変革と困難の時代」といわれる時代でした。多くの技術革新があり、同時に多くの不幸なできごとがありました。新しい技術のひとつ、活版印刷機によって「魔女」に関する書物やチラシが印刷され、多くの人々の目に触れることとなりました。悪い「魔女」のイメージが広い範囲にいきわたったのです。

また、宗教改革が起こったのもこの時期です。宗教改革を発端とする戦争が各地で始まりました。そして、地球規模の寒冷な気候によるたびかさなる飢饉と貧困。さらにペストの大流行。多くの困難、多くのわざわいが

「魔女」のしわざとされ、「魔女狩り」が行われるようになるのです。「魔女」の疑いをかけられた者は「魔女裁判」にかけられました。

「魔女」であることの証明は、疑いをかけられた者の自由によるしかありません。そのため「魔女裁判」では正当な手段として拷問が行われました。拷問に耐えて自白しなければ魔女ではないとして釈放されましたが、耐えられずに魔術を使ったことを認めてしまうと「魔女」として処刑されてしまったのです。なかには一度は耐えたものの、再び「魔女裁判」にかけられ、処刑されてしまった人もいます。

18世紀以降、「魔女狩り」の大きなうねりがおさまると「魔女」のイメージはゆっくりと変化していきます。いまでは「魔女」はファンタジー世界のヒロインとして、多くの作品に登場します。「魔女」は芸術家をも引きつける魅力あるテーマとして生まれ変わり続けています。

野草から痛み止めの薬をつくる。
ホウキにまたがり空を飛ぶ。
鼻をピクピク動かしてお客さんを犬に変える。
美魔女・・・。

「魔女」とは誰だったのでしょうか？ 「魔女の秘密展」であなたの答えをさがしてみてください。





『魔女に与える鉄槌』

『魔女に与える鉄槌』は、それまで個々に記されていた“魔女”の犯罪を体系的に記した最初のもので、内容は3部構成で、第1部では昔から伝承されてきた“魔女”の行為をひとつずつあげ、それが迷信ではなくキリスト教に対する異端となる事実であることを示しています。第2部で“魔女”の魔法についてくわしく述べ、第3部では裁判の方法を説明しています。

この書物は、“魔女”を定義付け、見分ける、“魔女”の使う魔術を説明し、尋問や拷問のやり方をことごとまかく具体的に教示した理論と実践にわたる魔女裁判官必携の書物でした。

『魔女に与える鉄槌』以前には、“魔女”の行った行為はそれぞれ個別の問題とされていましたが、この書物によって“魔女”は悪魔と結託した「異端者」としてみなされるようになったのです。

【写真左上から】

『魔女に与える鉄槌』 ハインリヒ・クラマー
1519年版 ミステルバッハ牧師館 ©Mistelbach,
Röm.kath.Pfarramt Mistelbach, Foto: Markus
Guschlbauer

スペインの長靴 16-17世紀 ツィッタウ市立博物館
©Städtische Museen Zittau/Jürgen Matschie
「スペインの長靴の使い方」 1769年 メルク、ベネ
ディクト修道会財団参事会図書館
©Melk, Benediktinerstift Melk, Foto: Markus
Guschlbauer

魔女の布 16-17世紀 ブファルツ歴史博物館 ©
Historisches Museum der Pfalz, Foto: Peter
Haag-Kirchner

魔女の布

四隅に房飾りのついたおよそ40センチ角の麻布です。焼けたあとが残っていて、この写真では指を下向きにした左手のようにも見えます。この布は「神の裁きの際に」使われたという記録が残されています。その裁判では、被告人は赤く熱した鉄を手に持ち、その後、布で密封し、3日後に開いたとき、手が膿んでいたら有罪、何もなければ無罪とされたといえます。ただし、この布がそうした裁判で使われたものかどうかは確かではありません。



スペインの長靴とその使い方

魔女裁判では、拷問は自白を得るための正当な手段だとされ、いろいろな拷問道具が用いられました。このスペインの長靴もそのひとつで、内側にとげのついた鉄板です。ねとふくらはぎを圧迫し、まずとげが足に刺さり、最後には骨を折ってしまうものです。

拷問のやり方には厳格な規則が設けられていて、使われる道具、回数、時間などが決められていました。1768年に起草された「テレジア刑法典」の附録にも道具の設計図や使用法が細かく指示されています。



日本では知り得なかった“魔女”がここにー！ ヨーロッパの魔女の歴史と真実を日本初公開



【写真左上から】

魔女、幸運児、ドルートたち フランツ・トラウンフェル
ナー 1958年頃 プンケンホフ11コレクション ©
Wien, Dr. Hannes Etalstonfer, Sammlung Punksenhof
11. Foto: Markus Guschlbauer

サバトへ行く前のレッスン ルイ=モリス・ブーテ・ド・
モンヴェル 1880 ヌムール城美術館 ©RMN-Grand
Palais / René-Gabriel Ojeda / distributed by AMF



魔女、幸運児、ドルートたち

『南ヴァルトフィアテルの伝説』のための挿し絵。ホウキにまたがって空を飛ぶ魔女が描かれています。

サバトへ行く前のレッスン

老魔女が大判の書物を指さしながら、ホウキと空を飛ぶための薬の使い方を若い魔女に伝授している場面です。サバトとは魔女の集会のことです。

19世紀になると“魔女”をモチーフにした作品が数多く創作されるようになります。若い魔女の美しさもさることながら、老魔女の真剣な表情にひきつけられる作品です。



展覧会情報



詳しくは、魔女の秘密展 [\[検索\]](http://majo-himitsu.com/) [f](#) [t](#)
<http://majo-himitsu.com/>

会 期■2015年7月18日(土)～9月27日(日)

開館時間■午前9時30分～午後5時(入場は午後4時30分まで)

休館日■月曜日(祝日の場合はその直後の平日)、第4火曜日(祝日の場合は開館)

【会期中の休館日：7/21(火)、27(月)、28(火)、8/3(月)、10(月)、17(月)、24(月)、25(火)、31(月)、9/7(月)、14(月)。ただし、9/24(木)は開館】

主 催■名古屋博物館、中日新聞社、東海テレビ放送、東映

観覧料■一般1,300(1,100)円/高生900(700)円/小中生500(300)円/前売ペア(2,000)円

()内は団体・前売料金。前売ペアは前売のみ。団体は20名以上。 *名古屋交通局の一日乗車券・ドニエコきっぷを利用して来館された方は100円割引。

*身体等に障がいのある方は手帳の提示により、本人と介護者2人まで当日料金の半額。



子どもたちがみた 伊勢湾台風

白水小学校の作文

伊勢湾台風後に南区白水小学校に在籍した児童らが書いた作文集「台風記」が小学校から博物館に寄贈されました。これらは、1,669人の児童・教師が書いた貴重な記録です。昨年から作文を書いた方を探し、150名をこえる方から公開の同意をいただき、当時の話を聞くこともできました。

作文に書かれた伊勢湾台風

内容はおおよそ7場面に分けられます。一部です
が引用しながら紹介していきます（原文ママ）。

場面①．台風が来る前の様子

「学校からかえって、こやにあながあいて、いたので、ぼくは、くぎと、いたとかなずちをもって来て、あなのところに、いたをうちつけました。」（三学年六組 新垣勇）

台風が来ることはわかっていて準備はしたが、実際の猛威は想像をはるかに超えていました。

場面②．台風が当夜から夜明けまで

台風が襲ってきた恐怖の夜。避難する間もなく、自宅の屋根裏や屋根にあがり一晩を過ごした人も多くいました。水に吞まれてしまったが、偶然助かり、九死に一生を得た人もいました。

「あとは、なにが何だか、わかりません。暗いどろ海の中を、早い流れにのって、流されました。急に目の前に、家が有りました。私は、その家に、のぼろうとすると、後ろから流れて来た木に足を、はさまれてしまい身動きが、できなくなってしまいました。水は、ふえて来るし、私はもうだめだと思いました。」（六学年二組 相根美弥子）

場面③．台風翌日

震えながら過ごした漆黒の夜。夜が明けると、忘れられない青空であつたと、皆さんが言います。しかし、眼下には壊れた家と丸太などが散乱し、遺体が浮かんでいました。

「私は二階のまどから、一面の海を見ていました。その海の道を、いかだで通っていく人達は、その死体を竹のぼうで顔を見ては、「こんな人ではなかった。」などと、つぶやいて通って行きました。」（六学年二組 吉田さとみ）

場面④．被災後自宅で小学校再開まで

翌日から長く続く避難生活が始まり、水が引くま

で屋根（裏）で生活した人々もいました。親が必死に生活を立て直す姿が、今も心に刻まれていると話される方もいました。

「やっと水がひきました。ぼくの家ではすぐどろ出しをはじめました。しんせきの人もてつだいにきてくれました。毎日毎日いっしょうけんめい手伝いました。」（四学年二組 稲熊秀雄）

場面⑤．避難先の家や学校での生活

親は自宅にとどまり、子どもだけが親類に預けられ、その地の学校に行く場合も多くありました。

「それからたくさんお友だちができて、すっかりなかよくなりました。そうしてずっとたってから、白水小学校がテレビにうつったので、みんながこいしくなったので、はやく自分の学校へいきたいなと思つて（以下略）」（三学年四組 阪納五月子）

場面⑥．白水小学校再開以降

「台風があつた日からもう二ヶ月半になりますが、今になつてもかえてこない友だちも二ー三人いますがだいたいみんな元気で学校へもどつてきました。」（五学年二組 富田博行）

10月19日に待望の白水小学校が再開されました。喜びの友人との再開、しかし、命を落とした142名もの児童、また、引越し、戻らない人もいました。

場面⑦．その他（児童たちの思いなど）

「人を殺した、台風、建物をこわした、流木。にくらしい流木や台風をなんとかして、止めることができなかったのだろうか」（六学年七組 川窪巧）

作文を書いた方を探しています

9月15日から10月25日まで、2階常設展フリールームにて、作文と当時の被害写真を展示する「子どもたちがみた伊勢湾台風」を行います。

これらの作文は、執筆者もしくはご遺族の同意を得て、公開します。さらに多くの作文を公開できるように、当時白水小学校（分校であつた現柴田小学校を含む）に在籍された方は、作文の有無を確認しますので、ぜひお問い合わせ下さい。（瀬川貴文）



伊勢湾台風後の白水学区（吉川萬吉氏撮影） 館蔵

ウィーンの考古学探訪記

名古屋市博物館は、オーストリアのウィーン博物館との間で、交換展を開催するなど交流を深めてきました。2000年には、展覧会や学術的な研究において、さらなる交流を進めることをうたった姉妹館提携も結ばれました。当館では、今後も展覧会や研究での交流を進める予定であり、その準備・交渉のため、今年1月、ウィーンを訪問しました。交流の具体的なテーマは、今後の協議次第ですが、私の専門である考古学の分野での学術交流も候補の一つです。ウィーンでは、その可能性も探ってきました。

ウィーン考古学事情

ウィーンというと、世界遺産である歴史地区やハプスブルク王朝の宮殿など、現在まで残されている歴史的な街並みが思い浮かびますが、その下にある遺跡については、日本ではほとんど知られていないといつてよいでしょう。しかし、そうした街並みの成立に至るまでには長い人間活動があり、街並みの下にはその痕跡を留めた数多くの遺跡が残されています。現在のウィーンの街の原型をたどると、西暦1世紀にローマ帝国が築いた軍事拠点ヴィンドボナにさかのぼります。そのヴィンドボナの遺跡については、これまで何度も調査が行われ、宿营地を取り囲む城壁やその内部で営まれた生活の様子等が明らかにされました。ヴィンドボナはウィーンの考古学の主要な研究テーマの一つとなっています。

ウィーン市内で、こうした遺跡の調査を進めているのは、ウィーン博物館のUrban Archaeology（都市考古学）という部門です。このUrban Archaeologyが行う発掘調査は、研究目的の調査ではなく、遺跡内での建築工事などに際して行う緊急調査です。調査の記録や出土遺物はウィーン博物館で保管され、展示等に活用されています。こうした遺跡保護は、名古屋市でも同様に行われています。

Urban Archaeologyを訪ねる

こうしたウィーンの考古学について知るため、Urban Archaeology部門を訪問し、部門長のフィッシャー＝アウゼレールさんにお話を聞きました。

まずは発掘調査の現場です。訪問したとき、郵便局の建設に先立つ発掘調査が行われていましたので、そこを案内していただきました。雪にそなえ、テントを張って調査が行われていました（写真）。

訪問した時点ではまだ遺構の調査は進んでいませんでしたが、調査の様子は名古屋の発掘調査風景と全く違和感のないものでした。洋の東西を超えてよく似た調査風景をみて、交流がうまく進められそうな、不思議な安心感が湧いてきました。

発掘調査で出土した遺物や作成した記録の整理作業、遺跡にまつわる情報の管理やその活用についてもお話を聞きました。ここでの一番の特徴は、ボランティアの方々の協力により様々な作業・分析、あるいは教育普及活動を行っていることでしょう。シニア考古学イニシアティブというプログラムでは、18才以上の方であれば、考古学の整理・分析作業に参加でき、現在は500人を超えるボランティアの方がいるそうです。ウィーンの発掘調査の概要データは、インターネット上で閲覧できますが、作成したのはコンピュータ関係の仕事をされていたボランティアの方とのことです。こうした市民参加の事業もウィーンの考古学の特徴です。

ウィーンとの考古学交流

こうしたウィーンの考古学と、名古屋の考古学との間には、何か議論が可能な接点はあるのでしょうか。

ローマの軍事拠点と同時代の弥生時代の名古屋には、同じように守りをかためた環濠集落かんごうが築かれています。城壁と濠という違いはありますが、朝日遺跡や西志賀遺跡のような大規模環濠集落とであれば、比較検討が可能かもしれません。日本では、大規模な環濠集落を「都市」と位置付けるかどうかという議論がありますが、幅広い視点で考える良い契機になるでしょう。あるいは名古屋市にも市民参加を特徴とする考古学事業がありますが、市民参加型の事業について意見交換するのも有効でしょう。

ウィーンの考古学の一端に触れ、交流の夢は広がります。これからもう少し着実に、様々な可能性を検討していきますが、交流の成果を皆様にお知らせできるよう努めていきたいと思っています。（村木 誠）



ウィーンの発掘調査風景

新収資料紹介

小栗コレクション

小栗鉄次郎氏が収集した考古資料など368件2,182点が、平成27年3月にまとめて博物館に寄贈された。これらは重要美術品2件を含む、愛知県の考古学・歴史を語るうえで欠かせない資料群である。

小栗鉄次郎

明治14年（1881）生まれの小栗鉄次郎氏は、主に西加茂郡の小学校の教師として勤務した後、愛知県史跡名勝天然記念物調査会主事として、愛知県内の文化財保護に尽力した。愛知県内の多くの遺跡の調査を行い、その中から史跡に指定されたものも多い。戦中には国宝の名古屋城障壁画などの疎開に尽力し、昭和前期の愛知県の考古学・文化財保護に大きな足跡を残した人物である。

小栗コレクションの概要

このコレクションは、名古屋市内や愛知県内の遺跡から出土した考古資料や、古代から近世にかけての和鏡などからなる。

名古屋市内の遺跡では、西区と北区にまたがる西志賀遺跡や瑞穂区瑞穂遺跡、熱田区高蔵遺跡など弥生時代の重要な遺跡の資料が数多くある。また、氏の故郷である現在の豊田市域の縄文遺跡から採集された石鏃などの石器も多い。さらに、150面をこえる鏡も、古墳時代から江戸時代までの日本の鏡の変遷を知ることができるまとまったコレクションとなっている。



写真1 重要美術品 壺と蓋 弥生時代・北区西志賀遺跡出土

二つの重要美術品

これらの資料は、今後整理をすすめながら順次公開していくことになるが、なんとといっても2件の重要美術品が含まれることが特筆される。

それが、西志賀遺跡から出土した壺（および蓋）（写真1）と、瑞穂区師長町出土とされる鳥形鈕蓋付脚付短頸壺（写真2）である。

壺 この地域では、弥生時代前期に、縄文文化系統の条痕文系土器と弥生系の遠賀川系土器という二つの土器群が存在し、両文化圏が交流する地域であったことが知られている。写真1の壺は、遠賀川系土器に位置づけられるもので、胴の部分が非常に強く張り、算盤玉のような独特な形をする。この地域の弥生時代前期の土器を特徴付ける資料である。

また、西志賀遺跡出土資料の中にはこの土器の他に、動物の骨や牙で作られた針や釣針、紡錘車なども多くある。あわせて、この地域の弥生時代の様子を知ることができる貴重な資料群となっている。

鳥形鈕蓋付脚付短頸壺 古墳時代後期（6世紀後半）の須恵器で、三段四方向に孔をあけた脚を付けた短頸壺と、鳥形の鈕をつけた蓋からなる。鳥形の装飾は、くちばしが平らで水鳥を表現するのかもしれない。胴部は、空洞となっており、現在土粒が入っているため振ると「からから」と音がするが、これが製作時に意図されたものかどうかはわからない。

古墳時代後期には、全国的に馬や犬などの動物や人などの装飾を付けた装飾付須恵器が作られるが、鳥形の装飾を付けたものは、東海地方（岐阜・愛知県）に集中する。

（瀬川貴文）

これらは、それぞれ弥生時代と古墳時代の尾張の文化を特徴づける資料として、常設展「尾張の歴史」で展示しています。ぜひ御覧ください。



写真2 重要美術品
鳥形鈕蓋付脚付短頸壺
古墳時代・瑞穂区師長町出土